

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00440

研究課題名(和文) リテラリー・マーケットの変容と初期モダニズム小説の語りの形成

研究課題名(英文) Changes in the Literary Market and the Formation of Narrative in Early-Modernist Novels

研究代表者

伊藤 正範 (ITO, Masanori)

関西学院大学・商学部・教授

研究者番号：10322976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：ヴィクトリア朝から20世紀初頭にかけて増大した群衆の影響力は、新聞・雑誌の発行部数の増大と軌を一にしながら、小説の「商品」としての側面を鮮明化した。本研究では同時期のリテラリー・マーケットの諸相に着目しながら、Charles DickensからJoseph Conradへと至る小説テキストにおいて、群衆の拡大、ジャーナリズムの発展、ならびに小説のコモディティ化が、どのような形で反映されているかを検証した。結果として、初期モダニズム期へと至る小説の語りに生じた種々の形式的変化が、読者層の大衆化と密接に連動するものであることを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

モダニズム文学が消費文化やポピュラーカルチャーといったいわゆる「通俗的」な要素と深い関わりを有していたという見方は、近年になって徐々に増え始めている。他方で、小説の商品化の進行がテキストの形式面にどのような影響を及ぼしていたかについては、これまであまり注目されてこなかった。本研究は、初期モダニズムへと至る小説の語りを、群衆から公衆へと遷移する社会的ダイナミズムの中で捉え直すという点において、大きな学術的意義を有している。またインターネットやSNSを通して大衆のあり方が大きく変わりつつある現代社会において、本研究は単なる過去の文化研究に留まらない社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)：The growing influence of crowds from the Victorian period to the early twentieth century accentuated, in parallel with the enlarging circulation of newspapers and magazines, the commercial aspects of the novel. By focusing on the situations of the contemporary literary market, this research aimed to investigate how the expansion of crowds, the development of journalism, and the commodification of the novel is reflected in the texts of Charles Dickens, Charlotte Bronte, Elizabeth Gaskell, H. G. Wells, and Joseph Conrad. Consequently, a close connection was discovered between the popularization of the novel's readership and the various formal changes that have arisen in the fictional narrative leading to the early modernist period.

研究分野：イギリス文学

キーワード：英米文学 イギリス小説 群衆 リテラリー・マーケット 商業 市場 モダニズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究課題は、研究代表者の過去の研究課題においてジャーナリズムや群衆に焦点を置いたモダニズム小説論の構築を試みる中で、それらの要素が小説を流通させる市場と不可分のものであるという問題意識に至ったことから着想した。

(2) ヴィクトリア朝小説とジャーナリズム、あるいは出版市場との関連については J. A. Sutherland, *Victorian Novelists and Publishers* (Bloomsbury, 1976) や John Drew, *Dickens the Journalist* (Palgrave Macmillan, 2003) において論じられており、またモダニズムとジャーナリズムの相関関係については Mark Wollaeger, *Modernism, Media, and Propaganda: British Narrative from 1900 to 1945* (Princeton UP, 2006) や Patrick Collier, *Modernism on Fleet Street* (Ashgate, 2006) などにおいて一定の研究が進んでいた。しかし、ヴィクトリア朝から初期モダニズム期にかけてのフィクションの語りの形成と出版市場との関連に光を当てる試みは、先行例に乏しい状況であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究課題は、19世紀中頃から20世紀初頭にかけての新聞・雑誌メディアの発展と軌を一にして拡大したリテラリー・マーケットにおいて、小説が商品としての位置づけを確立していったことに着目し、消費する大衆との関わりがテキストの語りの形成にどのような影響を及ぼしたかを考察するものである。

(2) その際に考慮するのは、当時の新聞・雑誌読者が、Gustave Le Bon の提起した新時代の群衆、あるいは Tarde の再定義した公衆として、出版物の内容に大きな影響を与え始めていたという事実である。Le Bon は、かつて世論を方向づけることにおいて大きな影響力をふるってきた新聞は、すでに「群衆の力の前にひれ伏さなければならなくなっている」とし、ジャーナリズムが「思想や主義を強化するあらゆる努力を放棄し、大衆の意見を反映するだけの「単なる情報供給機関」になり下がったと述べた。また Tarde は、そうした大衆を、旧来的な群衆から区別する形で公衆と呼び Le Bon よりも新聞側からの影響力を重視しながらもかつてよりもはるかに大きな力を帯びつつあることを主張した。大衆がこのような決定力を獲得しつつある時代において、新聞同様、大衆によって消費される商品としての立ち位置を固めつつある小説が、どのようにして自己の芸術としてのあり方との折り合いをつけていこうとするのかを、言い換えれば、その両者のせめぎ合いから生じるジレンマがテキストの語りにどのような影響を与えているのかを突き止めることが、本研究課題の目的である。

(3) より詳細には、現実世界における群衆の拡大に伴って、小説テキストにおける群衆表象にどのような変化が生じているかを見出しつつ、そうした群衆表象の変化が、ヴィクトリア朝から初期モダニズム期にかけてのフィクションの語りの変遷と密接に連動していることを立証する。さらには、大衆読者の拡大に伴いリテラリー・マーケットにおける商品としての側面を強めつつあった小説が、芸術としての自らのあり方との間に生じるジレンマからどのような新しい語りを生み出していったか、そしてそれが、ヴィクトリア朝から初期モダニズムへと至る文学的潮流の中にどのように位置づけられるかを考察する。

3. 研究の方法

(1) 分析の対象として想定したのは、ヴィクトリア朝から初期モダニズム期にかけての小説、具体的には Charles Dickens、Charlotte Brontë、Elizabeth Gaskell、H. G. Wells、Joseph Conrad の小説作品である。本研究では、当時の社会で生じていた群衆の拡大・変容が、フィクションの語りにどのような影響を及ぼしていたかを探るべく、テキストにおける群衆表象の精査を行った。その際、特に群衆表象が当時の大衆、そして新聞読者と重なる部分に大きな注目を寄せた。

(2) 同時に、個人の生が群衆との対照においてどのように提示されているかも分析の対象とした。伝統的に多との差異化によって、あるいは多の拒絶を通して個を提示してきた小説の語りが、群衆の台頭に伴って次第に権威的かつ倫理的な統制力を喪失し、代わって多の非決定性や無感覚さを内部化し始めていくことを立証するためである。

(3) Conrad, *The Nigger of the "Narcissus"* (1897) が連載された *The New Review* や、Wells, *Tono-Bungay* (1909)、Conrad, *Under Western Eyes* (1911) が連載された *The English Review* などの媒体、あるいはそれらの創設・編集に携わった W. E. Henley や Ford Madox Ford などの文芸エージェントを調査の対象に含め、当時のリテラリー・マーケットにおける小説の位置づけを探った。初期モダニズム小説が、商品としてのあり方と芸術としてのあり方との間でジレンマを増大させる過程で、独自の語りを発展させていったことを立証するためである。

(4) 小説テキストとジャーナリズムの流行との関連について探るため、同時期の新聞資料を収集し、テロリズム事件などの報道や、メディアにおけるセンセーショナルリズムに関する調査を行った。同時に、ヴィクトリア朝小説とモダニズム小説に関連する先行研究、ならびにジャーナリズムや商業文化等に関連する先行研究を収集し、調査を行った。

4. 研究成果

(1) Dickens を起点とし、Brontë、Gaskell、Conrad における群衆表象の変遷を辿った。Le Bon の群衆理論において「新時代の群衆」と定義される、ジャーナリズムを媒介とする大衆の形成過程を検証した。具体的には *Barnaby Rudge* (1841)、*Shirley* (1849)、*North and South* (1854) から *The Nigger of the "Narcissus"* に至る群衆表象を精査することで、外的な武力によって「鎮圧」される群衆から、内的な動機づけによって自らの暴走を「悔悛」する群衆へと、群衆表象が変遷していくことを見出した。また、その背後において作用しているのが、労働運動の拡大と成功に伴い、労働者たちがメディアを介して達成しつつあった好意的パブリシティーであることも明らかにした。ヴィクトリア朝からモダニズム期に至る群衆表象の変遷について通史的に捉えた研究は類例が少なく、さらにジャーナリズムを経由して変遷しつつあった群衆観が小説の語りに影響を与えていたことを捉えた点で、大きな学術的意義を有する研究成果となった。成果は論文『『北と南』における「恥じ入る」暴徒とヴィクトリア朝小説にたどる群衆表象の変遷』として発表した。

(2) 本研究課題の主要テーマであるリテラリー・マーケットの変容と初期モダニズム小説形成との関連を探るため、Wells、*Tono-Bungay* における群衆表象を分析した。主人公によって執筆された小説であるという設定がたびたび語りの中で強調されることに着目すると、メインプロットとなる専売薬「トーノ・バンゲイ」の成功譚が、人気小説を次々に出すことで財を成した Wells 自身の伝記的背景と大きく重なることが見えてくる。こうした語りの背後には、20 世紀初頭における商業的潮流の昂進に直面した Wells による、商品としての小説のあり方や、当時の出版メディアにおける販売戦略、そして小説と読者とが取り結ぶ関係についての洞察を見出すことができる。さらにそうした洞察が、当時の芸術至上主義運動のただ中における、Wells 固有のモダニティーへといかに結びついているかを検証しながら、初期モダニズム小説の語りの形成に広告や読者、すなわち購買者の存在が不可分に結びついていることを立証した。Wells をモダニズム運動の中で捉える試みはこれまでも行われてきたが、小説と市場の関係の変遷に着目したものは類例がなく、新しい Wells 論を構築することに成功した。本研究成果は論文『『トーノ・バンゲイ』に見る商業主義と商品としての小説』として発表した。

(3) Dickens、*Oliver Twist* (1839) を主な研究対象とし、ヴィクトリア朝初期の群衆表象と小説の出版形態の変遷との関連を探った。具体的には、テキスト内に度々登場する群衆の背後に、大衆文化やジャーナリズムの隆盛に伴って形成されつつあった新しい大衆の姿を見出した上で、そうした大衆が小説の語りにどのように内部化されているかを検証した。それらの大衆は、一方向的な関心に突き動かされた存在であるという点において、同時代の街頭でしばしば通行人を集わせていた大衆人形劇「パンチ&ジュディ」の観客や、犯罪記事を「消費」する新聞読者と重なり合う。だが同時に、小説が連載出版の一般化に向けて急速に舵を切りつつあった当時、小説読者もまた大衆化への道を歩みつつあった。本研究では、*Oliver Twist* の語りが、そうした大衆読者を法廷の群衆として内部化することによって公的な位置づけを行うと同時に、独房で祈りを捧げる主人公の姿を通して、その視線を共感が支配する私的領域へと誘導しようとしていることを見出した。もともと「個」の生を扱う小説と、一時的な熱狂やセンセーションにアピールしていく大衆メディア文化とは、内包しているベクトルに相違がある。本研究は、そうしたギャップによってテキスト内に生み出される特有の力場を解明した点において、大きな意義を有するものである。また、初期モダニズム小説の語りとリテラリー・マーケットの変遷との関連を探る本課題全体において、19 世紀末期のジャーナリズムと小説を取り巻く新しい読者層の出現へと至る洞察を提供するものとなった。成果は論文『『オリヴァー・トゥイスト』における群衆表象とヴィクトリア朝の小説読者』として発表した。

(4) Conrad、*The Secret Agent* (1907) を主な研究対象とし、小説の商品としての位置づけの明確化が、フィクションの語りの形成にどのような影響を及ぼしているかを検証した。具体的に注目したのは小説中に登場する 3 つの群衆表象、すなわちグリニッジ天文台爆破事件の速報を売る新聞販売少年たちが呼びかける通行人たち、路上で「崩れ落ちた馬たち」の見物に群がる野次馬たち、そして背丈の低い、当時のいわゆる「退化者」(degenerate) としての身体的徴候を呈する Professor を取り囲む路上の群衆である。本研究ではそれらの群衆表象に注目しながら、変容しつつあるリテラリー・マーケットへの二重のレスポンスとして、テキストがセンセーショナルな主題を取り込みつつ、同時に語りに「断片」を散りばめることによって新しいフィクションのあり方を開拓していったことを見出した。この検証に際しては、当時コンラッドの小説や短編が連載された新聞・雑誌の調査、さらには書簡における出版関連事項への言及の分析を通して、Conrad と出版市場との関わりについて精密に探った。また、この小説の中心的題材であるグリニッジ天文台爆破事件、ならびに 1880 年代から 1900 年代にかけてイギリス・ヨーロッパで発生したさま

ざまな爆弾事件について報道した新聞・雑誌を調査することによって、*The Secret Agent* の主題そのものが、当時のテロリズム報道に付帯していたセンセーショナリズムと不可分のものであることを見出した。なお、理論構築にあたって、本研究課題期間開始後に出版された Joseph, Marris, *Victorian Literary Businesses: The Management and Practices of the British Publishing Industry* (Palgrave Macmillan, 2019) におけるヴィクトリア朝の出版産業に関する最新の研究も参考にした。ヴィクトリア朝期以降の小説研究において、群衆表象の分析を通してテキストの政治的姿勢を探ろうとする試みはこれまでもなされてきたが、本研究は、*The Secret Agent* に登場する路上の群衆が、当時の新聞読者と直接的あるいは間接的にリンクしていることに着目した点に独自性を有しており、同時にテキストの主題・形式の両面における自己決定が当時の小説そのものを取り巻く商業的環境の変化と密接に連動していることを見出した点において、従来にない小説論となった。上記の成果については“*The Secret Agent and Reading Crowds: Dynamite, Fragmentation, and the Novel*”として、英国コンラッド協会会誌の *The Conradian*, vol. 48, no. 1 (2023 年発行予定) に掲載予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Masanori Ito	4. 巻 48.1
2. 論文標題 The Secret Agent and Reading Crowds: Dynamite, Fragmentation, and the Novel	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Conradian	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 正範	4. 巻 67.4
2. 論文標題 『オリヴァー・トゥイスト』における群衆表象とヴィクトリア朝の小説読者	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 商学論究	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 正範	4. 巻 28
2. 論文標題 『北と南』における「恥じ入る」暴徒とヴィクトリア朝小説にたどる群衆表象の変遷	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ギヤスケル論集	6. 最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 正範	4. 巻 22
2. 論文標題 『トーノ・バンゲイ』に見る商業主義と 商品 としての小説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 43-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------